

その 7

令和の考案者が 選んだ万葉秀歌



久方乃 月夜乎清美 梅花 心開而 吾念有公

「ひさかたの 月夜(つくよ)を清み 梅の花 心開(ひら)けて 我(あ)が思へる君」

(空遠くまで輝く 月夜が清らかなので 夜開く 梅の花のように 心も晴れ晴れと 私がお慕いするあなたよ)

紀小鹿郎女(巻8・1661)

「日めくり万葉集」の選者の選定にあたっては、「時の天皇から無名の庶民まで」という万葉集の作者たちに倣って、各界幅広い分野の方々に出演をお願いした。日本を代表する歌人や作家の方々と言うまでもなく、万葉集を愛する歴史家から画家、音楽家、俳優、料理研究家、天文学者、さらには外国人まで、その数 168 人に及んだ。古来万葉集関連の著作や論述は数え切れないほど数多ある。4516 首にも及ぶ膨大な歌の数々について、これまで多くの専門家が、時代を越えて大部の著作、論文等で解説、解説してきた。それは現代も同様で、万葉集の研究者は数多く、その研究成果も膨大である。しかし、「日めくり万葉集」は、監修の先生方を除いて、あえて選者から万葉集の専門家をはずすことにした。その理由は、万葉集の専門的な解説ではなく、各界で活躍する文化人それぞれの仕事や立場、そして人生経験を踏まえて、現代的な視点から万葉秀歌を読み解き、万葉集の魅力とそれぞれの熱き思いを語ってほしかったからである。

ただ、その原則に反して、160 人余の選者の中で 1 人だけ万葉学者が入っている。番組のねらいの上で専門家をはずすことは異論がないにしても、だからと言って専門的な視点をすべて排斥するということにはならない。そこで、専門家を代表する形で、1 人だけ選者をお願いしよう、ということになった。

その選定はきわめて簡単だった。万葉集研究の第一人者として評価の高い、当時奈良県立万葉文化館の中西進館長だった。「日めくり万葉集」の放送が終了した翌年の 2013 年、「中西万葉学」とも評される長年の業績により、文化勲章を受賞されている。現在は富山県立高志(こし)の国文学館館長の職にある。

そこで、新元号「令和」である。2019年4月1日、当時の菅官房長官から、国書からは初めてとされる万葉集由来の新元号が発表されるとすぐ、新元号の考案者探しが始まった。しかし、その答えは、「日めくり万葉集」の選者の選定と同様簡単だった。私も、早選手許にあった1冊の万葉本を取り出して、その巻5の梅花の歌の「序」の口訳と、発表になった引用文の訳文を照らし合わせてみた。1字の違いもなく同文だった。その本は、中西進著『万葉集 原文付全訳注』（講談社刊）。もし他の万葉学者が考案者だとしたら、一字一句訳文が同じということにはならないだろう。

ということで、新元号の命名者は中西進氏であることはほぼ明らかだった。翌日の新聞、テレビも「中西説」を一斉に報じた。政府も、またご本人も、「お話しすることはありません」として、公には明言しないが、衆目の一致するところだろう。中西氏は、近刊の著書の帯に、こう書いている。「万葉集は、『令(うるわ)しく平和に』生きる日本人の原点です」。新元号に込めた願いは、まさに「令しく平和に」にある。そこで、「令和」の考案者は中西氏であると断定したうえで論を進めていくことにする。



改めて、「日めくり万葉集」に戻る。選者をお願いした中西氏には、他の選者の方々より多い5首を選んでもらった。その結果中西氏が選んだ5首はすべて、私にとっては初見の歌だった。つまり、「万葉集宣伝係」を自称しながら、恥ずかしいことには、歌も、その詠み手の名も知らなかった（ただし、1人は名前の一部が違っていたので気がつかなかったが、私が好きな歌人と同一人物だった。その話は、いずれ）。私の不勉強もあろうが、私だけではなかったようだ。この5首の中には、先に紹介した、「日めくり万葉集」ベスト10の1首も、そして、いわゆる万葉ファンタジスタと呼んだ歌人の1人も入っていなかった。正直この選歌を見て、「専門的にすぎないか?」、「だから専門家は?」という疑問符がついたのも確かだ。一方、なぜこれらの歌、つまり、各界を代表する文化人も含め、ほとんどの人が知らないと思われる歌を選んだのか、専門家としての中西氏の選歌のねらいに興味を湧いたのもまた確かだった。結果的には、その後元号の考案者となった選者がどのような歌を選んだのか、その選んだ5首を読み直すことで、「令和」を引用、考案したねらいや思いが分かるかもしれない、と考えた。そこで、この5首とそれを選んだ中西氏のコメントをまずは簡潔に紹介する。

冒頭の梅花の歌は、中西氏が最初に取り上げた歌で、梅の花と言うと、まずは元号の典拠となった大宰府の梅花の宴が思い起こされるが、その歌会で詠まれた歌ではない。しかし、多少の接点があった。それは、この梅花の宴に13歳の時立ち会ったと思われる大伴家持である。この歌の作者紀小鹿郎女（きのおしか

のいらつめ) は人妻で、年下の恋人に贈った歌だが、その贈った相手が名門の青年貴族……それこそが成人した家持だった。とすると、梅花の宴から 10 年ほど後の歌ということになるだろう。

中西氏は、この歌を取り上げた理由として、「感性の繊細さ、的確な表現力、現代の詩人の作と言ってもおかしくない」と評している。確かに梅花の宴で、歌の名手たち、それもすべて男の歌人たちが詠んだ 32 首の歌と比べて、熱い思いを詠みながら涼やかで研ぎ澄まされた感受性が匂い立っている。

次は、万葉集の歌で最南端、薩摩で歌を詠んだ歌人、長田王（ながたのおおきみ）。この九州への遙かなる旅は体のよい配流だったかもしれないという、放浪の生涯を送った歌人の歌である。

「うらさぶる 心さまねし ひさかたの 天のしぐれの 流れあふ見れば」

(詫びしい思いが胸をみたく 無限の空をこめて 時雨の 降りつぐのを見ると) 長田王(巻 1・82)

中西氏は語る。「すべての雑念、欲情がなくなり、まるで自分の命が普遍化され、宇宙の一つになるかのごとく透明化していく。日本の風土と自分を対面させることによって、奥深い自然と魂を向き合わせている素晴らしい歌です」。この歌も、「うらさぶる心」をかかえながら、歌人のものを見る目は透き通っている。

次の歌は、作者未詳歌。そう言えば、万葉秀歌ベスト 10 には作者未詳歌は 1 首も入っていない。

「うつせみの 常の言葉(ことば)と 思へども 継ぎてし聞けば 心惑ひぬ」

(世間に 決まり文句だとは 思うけれど 聞かされ続けると 心はやはり迷うよ)

作者未詳(巻 12・2961)

中西氏は言う。「万葉集にはこの歌のように、作者のわからない歌が半分以上あります。つまり、名もなく、貧しく、しかし、美しく生きている。そういう人たちの歌が半分以上を占めている。それが特色です。これは、そういう人たちを代表するような歌だと思います」。貧しい庶民の歌だが、その心は豊かだ。

次の 2 首は、いずれも上野国の東歌。上野国は現在の群馬県。また、東歌とは、当時は辺境の地だった東国の歌で、現在の関東地方や陸奥まで広い範囲で歌われた約 230 首が収められている。東国の農民たちの暮らしや思いが豊かな東国方言を交えて詠み上げられている。

「上野(かみつけの) 安蘇(あそ)のま麻群(そむら) かき抱(むだ)き 寝(ぬ)れど飽(あ)かぬを あどか我(あ)がせむ」

(上野の 安蘇の麻束を 抱きかかえて 寝るのに満足しない 私はどうしたらよいか)

東歌・上野国歌(巻 14・3404)

中西氏、「万葉集にはたくさんの恋歌がありますが、果せるかな口をそろえて『あの人と一緒にいたい』『あの人と共寝したい』ということばかり詠う。大半の歌はそれが最終目的なんです。ところがこの歌は、その次を聞いている。もう共寝は成就した。それで満足するのが普通なのに、この作者だけが、さてどうしたらいいだろうと詠う。そこにこの歌の凄さがある。万葉集 4516 首中、共寝の次に愛の成就を求めたのはこれだけです」。万葉集に恋の歌は数多いが、愛を詠った歌は少ないのだろうか。



もう 1 首が、その 1 つ前の、同じ上野国の東歌。

「我(あ)が恋は まさかまかなし 草枕 多胡(たご)の入野(いりの)の 奥もかなしも」

(私の恋はいまもかなしい 草を枕の多胡の入野の 行く末もかなしい)

東歌・上野国歌(巻 14・3403)

「私の恋はかなしい。永遠にかなしいという。そのことが、千万言の言葉を語る以上に雄弁に、恋とはなにかを語っていると思うんです。『かなし』は悲哀の『哀』という字も書きます。しかし、人を愛するの『愛』、これも『かなし』です。むしろこの方が、元の日本語なのです。『かなしい』というのは、いとおしさのあまり生じる切なさを言ったのです。『かなし』という言葉は、東国の人たちの持っていた単語らしいのです。都の人間が持っていなかったこの言葉に注目したのが、大伴家持でした。万葉集の中でどの歌が一番好きかと聞かれた時、私が挙げるのはこの歌です。4516 首中の 1 位の歌ですね」。

この話を聞いて驚いた。「万葉集中どの歌が一番好きか？」と問われて、中西氏は、額田王や人麻呂、赤人ではなく、作者の名もわからない辺境の地の東歌を、「4516 首中の 1 位」と断言した。「日めくり万葉集」の 160 人余の選者は、他に誰もこの歌を取り上げた人はいない。しかし、なぜこの歌を選んだのか話を聞くと、ほんの短い説明でも一々納得することができた。

最初「だから専門家は……」と非難がましい思いで受け止めた 5 首すべてについて同じことが言える。繰り返すが、中西氏が選んだ 5 首は、「日めくり万葉集」のベスト 10、万葉歌人ベスト 10 のみならず、数多あ

る万葉秀歌、万葉歌人ランキングのどれにも収められることがない歌であり歌人である。いや、歌人でさえない。そのような名だたる歌人ではなく、作者が未詳の歌、当時の辺境の農民たちの歌、いずれも権力者や歌聖、権威や威光とは無縁の、無名にして有為、貧しくとも豊か、秘して愛しい歌 5 首が選ばれていたことに、改めて気がついた。そう、今さらながら、類まれ卓抜な選歌だったことに否応なく気づかされたのである。

選歌のねらいは明快で、万葉集の第一人者、その道の権威としての上から目線ではなく、天皇から庶民までの膨大な万葉秀歌の大海に潜り込み、言葉の深海にひっそり身をひそめる令しき貝を探し出し、そこから 5 首を引き上げている。もしかしたら、ただ 1 人の専門家として、他の選者たちの選歌からはこぼれそうな秀歌を掬い上げようという意図があったかもしれない（こぼれた歌を拾い上げたのではない）。それはそれとして、あえて新元号の「選者」と呼ばせてもらえば、この選者は、万葉秀歌を選歌するのと同じ目線、同じ思いで、新元号を選び出したものと思われるのである。

「令」が思い起こされる。この選者が命名した「令和」は、万葉集の「令」であり、命令の「令」ではない。「令しく平和に」の「令」である。だからこそ、新元号が万葉集から引用された意義がある。新元号を発表した菅総理には、改めて「令和」の典拠を思い起こし、分厚い万葉集をひも解く時間はないだろうから、この 5 首だけでも繰り返し読んで、新元号考案者が「令和」に込めた思いを改めて汲み取ってほしい。

あえて言えば、たかがテレビ番組のために真摯に選んでくれたこの 5 首と、新しい時代に向けて願いを込めて、いや、祈りを込めて選んだであろうこの「令和」は、中西氏の半世紀を超える万葉集研究の果実であり、その結晶である、と言っても間違いではないだろう。今や世界は混沌とし、これまでにない未曾有の危機に直面している。過去の歴史を見ると、疫病と災害、災厄、そして戦争が重なった例が多いという。わが国のみならず全世界がコロナ禍を乗り越え、「令しく平和」な時代、「令和」新時代を迎えることを願うばかりである。

